早稲田大学大学院文学研究科紀要 第70輯（2025年3月）
Bulletin of the Graduate School of Letters, Arts and Sciences of Waseda University Vol.70 (Mar.2025)

ルーシ人はビザンツ帝国の危機をどう見たか

――1204年と1453年のコンスタンティノープルの事件についての二つのルーシ人の物語から[1]――

三　浦　清　美

1．はじめに　―　ビザンツとルーシ

本稿では、『1204年の十字軍によるツァリグラード征服の物語』[2]と、『1453年のトルコ人によるツァリグラード征服についての物語』[3]という、コンスタンティノープルの壊滅をテーマとする二つのルーシの作品によって、ルーシ人がビザンツ帝国の危機をどう見たかを考えてみたい。このことを通して、ビザンツとルーシの関係性についても検討する。いずれの作品も筆者による日本語訳と、平野智洋による解説と注がある。以下では、前者を『1204年の物語』、後者を『1453年にかんする物語』と呼ぶことにしよう。

ルーシというのは、やがてロシア、ウクライナ、ベラルーシに分岐していく東スラヴ人の居住地区の古名で、リューリクの建国（862年）にはじまり、モンゴルの侵寇によるキエフ陥落（1240年）をもって滅亡する、一つの「国」である。その当時、この「国」の中心はキエフであったために、キエフ・ルーシと呼ばれることがある。モンゴル侵寇までは「国」、つまり一つの共同体であったと考えられる。モンゴル・タタールによる支配のなかから、14世紀から16世紀にかけて、モンゴル・タタールの間接統治を受けた地域がロシア、13世紀後半に当時異教を奉じていたリトアニアの支配下に入った地域がベラルーシ、カトリックを信奉するポーランドの支配下に入ったものの、正教信仰を保とうとして奮闘した地域がウクライナとなる。キエフ・ルーシという「国」は、モンゴル・タタールのくびきを経て、３国に分岐した。

リトアニアはやがてポーランドと合同国家を作り、14世紀後半にカトリックに改宗したため、ウクライナとベラルーシにはカトリックの影響が残る一方、ロシアはギリシア伝来の東方正教の

（１）　本稿は、2018年３月25日に金沢市のくすのき憲政館で行われた日本ビザンツ学会第16回大会の報告「ルーシ人はビザンツ帝国の危機をどう見たか―1204年と1453年」を改稿して論文に改めたものである。

（２）　三浦清美・平野智洋「1204年の十字軍によるツァリグラード征服の物語」Slavistika XXXII、2017年、323-342頁。英訳がある。J. Gordon (trans.) “The Novgorod Account of the Fourth Crusade,” *Byzantion* 58 (1973)、pp. 297-311.

（３）　三浦清美・平野智洋「1453年のトルコ人によるツァリグラード征服についての物語―中世ロシア文学図書館（V）」『エクフラシス』別冊１号（早稲田大学ヨーロッパ・中世ルネサンス研究所）、119-159頁、2014年。

純粋性にこだわり、カトリックの影響を排除しながら、ギリシア正教をロシア正教に変容させた。ロシアという国号が公称されるのは17世紀のことだが、モスクワ大公国がのちのロシアに発展していくと考えてよいと筆者は考える。やがてロシアとなるモスクワ大公国は、ビザンツ帝国の直接的な後継者であるという自意識をもっていたからである。

（キエフ・）ルーシは、建国のはじめから、ビザンツ帝国と特別なつながりをもっていた。ルーシ最古の年代記、『過ぎし年月の物語』によれば、862年のリューリクによる建国以降、ルーシはビザンツの富に憧れて数次にわたるコンスタンティノープル遠征を行うが、その過程で相互理解が深化して、ついに988年には、ビザンツ帝国からキリスト教を受容するに到る。キリスト教受容の見返りに、キエフ大公ウラジーミルは、ヴァルダス・フォカスの乱に苦しむビザンツ皇帝バシレオス２世への軍事支援を約束し、バシレオス２世の妹アンナがウラジーミルに嫁ぐことになる。ビザンツからのキリスト教受容は、その後のルーシ、ロシアの運命を決定づける重要な事件となった(4)。

ギリシア正教にもとづく領域統合が成功したウラジーミル聖公（978-1015）、ヤロスラフ賢公（1019-1054）の時代のあと、諸公国が林立し、抗争する時代がつづくが、ここにふたたび統一を与えてキエフ・ルーシに中興をもたらしたキエフ大公ウラジーミル・モノマフは、キエフ大公フセヴォロド・ヤロスラヴィチとビザンツ皇帝コンスタンティノス９世モノマコスの娘イレネーの子であった。彼の通称であるモノマフは、祖父であるビザンツ帝国マケドニア朝皇帝のあだ名から来ている(5)。ルーシは政治的にのみビザンツとつながっていたわけではなく、聖山アトスを中心とした正教修道士たちの国際的ネットワークに代表されるように、社会の中下層においてもビザンツ文化圏に抱き込まれようとしていた。

こうした全体的な状況のなかで、ルーシ人たちがコンスタンティノープルの動向につねに注意を払ってきたとしても、それは驚くべきことではない。ことに、第４回十字軍によってコンスタンティノープルが壊滅した1204年と、オスマン帝国のメフメト２世によってコンスタンティノープルが陥落し、ビザンツ帝国が滅亡した1453年というビザンツ帝国の節目で、ルーシ人の手になる史料が残されている。私たちはこれらの史料から、ルーシ人がこれらの世界史的大事件とビザンツ帝国そのものとをどう捉えていたかを窺うことができる。

『1453年にかんする物語』は、『1204年の物語』よりも時代的にあとに書かれているが、前者は後者の５倍の分量であるうえに、ビザンツ帝国の滅亡をテーマとしているために、作品の叙述もより複雑であり、それがあたえるインパクトもより強烈である。このためにまずは『1453年にかんする物語』の世界観について考察したのちに、『1204年の物語』の叙述がより簡潔であること

（４）　國本哲男ほか『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会、1987年、23-135頁。
（５）　ウラジーミル・モノマフ // 平凡社大百科事典 Ver. 1.0（日立デジタル平凡社）

の意味を考えたい。

2.『1453年にかんする物語』の概括

『1453年に関する物語』は、長らくオスマン帝国の捕虜となり、割礼をも受け入れていた改宗キリスト教徒であったネストル・イスカンデルの作とされている。しかしながら、この作品が中世ロシア文学の伝統をよく吸収したすぐれた文体と象徴体系をもっていることを鑑みると、スラヴ文語の伝統から長らく遠ざかっていた捕虜によって書かれたことはありえないとする説が有力視されている。作者が、コンスタンティノープルでビザンツ帝国の滅亡を直接目撃した、才能ある一人のスラヴ人文筆家であったことだけは確実で、そのほんとうの作者が波乱万丈の生涯を送ったとされるネストル・イスカンデルという名前を名乗ったものであると推測されている(6)。ネストル・イスカンデルはこの作品の末尾で、自らのことをこう書いている。

> これらのことを書いたのは、私、罪多く無法なるネストル・イスカンデルである。私は、若き頃より虜囚となり、割礼を受け、長いあいだ軍事遠征に参加して辛酸をなめ、この呪われた信仰（イスラームのこと―三浦注）のなかで死ぬことがないようにと、あちらこちらを身をひそめて過ごした。この偉大なる恐ろしい事件のなかで、私はあるときは病の振りをし、あるときは隠れ、あるときは自らの友人に匿われ、いまにいたるまでとにもかくにも生き延び、あらゆることを検討し、すべてのことについてつぶさに見きわめる時を得て、トルコ人たちによって城砦の外側でおこなわれたことを、毎日毎日書きつづけたのである。そして、その後、神の黙過によって私たちは城砦のなかに入り、敬意に値する偉大な男たちから、信仰なき者たちにたいして城砦のなかで行われた事績について、時にあたって話を聞きおよんで集め、手短に述べて、このきわめて恐ろしい驚くべき神のご意志を記憶にとどめるべく、キリスト教徒たちに語り伝えたのである。(7)

この作品の作者は、ビザンツ帝国の衰亡には同情している点で、プスコフの修道士フィロフェイによる「モスクワ第３のローマ説」とは一線を画している。フィロフェイは、ビザンツ帝国がカトリックとの合同に同意したことに対して神がお怒りになり、苛烈なるムスリム（オスマン帝国）の軍隊を送ってビザンツ帝国を最終的に滅ぼしたと考えているが、『1453年についての物語』の作者ネストル・イスカンデルはもう少し政治的に中立で、感情表現も穏やかである。その一方

（6） *Творогов О.В.* «Нестор Искандер» // Словарь книжников и книжности Древней Руси. Вторая половина XIV-XVI в. ч.2. Л-Я; *Творогов О.В.* вступление «Повесть о взятии Царьграда турками в 1453 году // Библиотека литературы Древней Руси. Т. 7. С.

（7） 三浦・平野「1453年についての物語」、159頁。

で、ネストル・イスカンデルがビザンツ帝国をやや突き放して見ていることは確かで、オスマン帝国のスルタン、メフメト２世によるコンスタンティノープル陥落、ビザンツ帝国の滅亡は、神に対する住民の罪へ神から下された罰にほかならず、人間がどんなに努力したとしても避けることができなかったと考えている。ここには、東方正教会世界に共通の空気のようなものが感じられる。この世界観と叙述のあり方については、のちに詳しく検討しよう。

この作品の資料的価値にかんしては、ビザンツ史家、平野智洋が、筆者による日本語訳に対して「作品解題：ネストル・イスカンデル『1453年のトルコ人によるツァリグラード征服についての物語』叙述内容と資料的価値」(8)という解説を寄せている。この平野の解説にしたがって、作品の概要を見ていきたい。

平野によれば、オスマン朝による1453年のコンスタンティノープル陥落、ビザンツ帝国滅亡は、当時の重大事件として、ギリシア語（ゲオルギオス・スフランヅィス、ラオニコス・ハルココンディリス、ドゥカス、ミハイル・クリトヴロスほか）、ラテン系言語（ジャコモ・テタルディ、ニッコロ・バルバロ、ゾルジ・ドルフィン、ヒオス司教レオナルドほか）、トルコ語（トゥルスン・ベイ、ネシュリー、エヴリヤ・チェレビほか）など諸言語の各種史料に記録されて現在に伝わっている。

平野は、事件描写の正確性・客観性（ことに両軍兵力の記録、戦闘状況の描写）、事件の歴史的解釈とそれを裏づける歴史観のふたつの観点から、この作品の「書物としての価値」を論じている。

まず、事件描写の正確性についてであるが、この点では、本作品の評価は複雑だという。軍事的側面からは、他史料との整合性がおおむね認められている。両軍の基本的な布陣について、および全般的な戦況の推移にかんしてはおおむね正確である。しかし、他史料で言及される重要な事件、たとえばオスマン艦隊の陸送（レオナルド、トゥルスン、エヴリヤらによる記録）や、包囲の続行をめぐるオスマン陣営での意見対立（テタルディ、レオナルドらによる記録）について、本作品は沈黙している。女性やアルメニア人住民の戦闘参加については、ほかの史料に言及はなく、興味深い記述となっている。

本作品の記述においてもっとも独自性と重要性が認められるのは、長い攻防戦の毎日の記録という体裁と、そこに巻きこまれたほぼすべての人々の行動記録であると平野は述べている。具体的には、この作品の著者は、攻防戦のあいだじゅうに神品（聖職者）や在俗の非戦闘員また女性らによって行われていた祈禱、糧食、戦死者遺体の取り扱いなどについて記している。さらに、帝都陥落直前の総主教と皇帝との対話も注目される。この対話は、当事者たちが信仰者として、今まさに進行中のこの重大な事件をどのように解釈しようしていたかを表すという点で、歴史観

（８） 三浦・平野「1453年についての物語」120-123頁。

の問題とも絡み、大きな意味合いをもっている。

一方で、戦闘の時間的推移にかんしては、不整合が見られると平野は言う。とくに、包囲戦の開始日（４月４日、５日）についての言及が欠落している一方、演出的な効果を狙ってか、５月に主要な事件をすべて縮約させようとする傾向が見られる。ほかの史料では、５月29日の総攻撃中に起き、戦局を決定したと明記されている傭兵隊長ジュスティニアーニの負傷離脱が、この作品では、前日に起きたものと記されているが、平野によれば、これは恐らく事実の誤認である。

この作品の著者は、防衛側・攻囲側双方にかんする一定の知見を得ており、人名、地名、官職名など精密な叙述を心がけていると平野は述べている。そのなかには、本作品にのみ言及のある人物や、ほかの史料ではほとんど言及されていない事柄の記述がある（ニコラオス・クデリス、国務長官スフランヅィスにかんする言及など）一方で、オスマンの軍司令官、州知事（ベイレルベイ）と県知事（サンジャクベイ）の名前が混同されていたり、戦闘の初期に解任された海軍提督バルタオウルが最後の総攻撃時にも言及されたり、包囲戦を戦い、生きのびたエメル・ベイやイシャク・パシャが戦死したなどの記述がある

次に、この作品の歴史観について考える。平野によれば、この作品の歴史観は、疑いなくコンスタンティノープル陥落を、住民の邪悪と罪に帰するキリスト教的「神罰論」である。これは、当時のキリスト教徒には広く共有された観点であったが、その視点についてはいくつかの相違も存在している。

ラテン人（ローマ・カトリック教徒）やドゥカスのような教会合同推進派の視点からは、ビザンツ人が教会合同を拒絶した分離派ゆえの罪によって帝国滅亡を招いたと論じられる。一方で、オスマン統治下最初の総主教ゲナディオス２世のように正教の伝統を重んずる者たちは、帝都陥落が異端（すなわちカトリック）との合同に対する神の怒りであるとの解釈に立った。プスコフのフィロフェイもこうした立場に立っている。教会合同をめぐる問題によって滅亡論を説く、こうした論者たちとは別に、一般的な人類、キリスト教徒の罪に陥落を帰する記録者（ビザンツ・ギリシア人）も数多く、平野によれば、これは複雑な神学論議、教会制度の問題にたいする関心や知見にこだわりのない当時の一般的な市民、住民たちの視点を反映している。この作品の神罰論は、うえに挙げたなかでは第三の、もっとも一般的な解釈に近い。教会合同をめぐる問題はいっさい取りあげられていないことが、その特徴である。

またその叙述スタイルとして、単純に事件の全体像を神意の反映（神罰）として描き出しているだけではなく、最終的な陥落にいたる過程でのさまざまな事件にも、こまかに神意が織りこまれていることも指摘されねばならない。平野によれば、この作品の表現方法は、教会で日常に行われる説教の形式、あるいは聖人伝の形式をある程度取り入れた結果である。神意の発露として、とくに陥落直前にはさまざまな超自然的現象が現れたことが強調されるが、これは同時代史料のいくつかと共通しており、新奇さよりはむしろ定番としての要素である。帝都の創建と滅亡を二

人のコスチャンティン（コンスタンティノス）に関連づける予言、そしてパタラのメトディオスらによる黙示録的解釈には、同時代のビザンツ史料などとの共通性、並行性が認められるという。同時に、この事件にたいする将来的な復讐者としてルーシ－ロシア人を据えたくだりは、帝都陥落に対するロシア人の考えを反映した、本作品独自の視点と見ることができる。

以上のような観点から平野は、この作品を「聖人伝・致命者伝の要素が色濃い」ものと評価している。交戦した両軍の戦力・兵員数については触れられていないのに対し、戦死者の数、著名な戦死者、刑死者の名前が逐一明記されていることは、「致命者芳名録」としての性格を示している。そしてこの叙述の主役を占めるのは、皇帝コンスタンティノス11世パレオロゴス帝(9)であり、信仰をめぐる総主教との長い対話、出陣前の祈りと英雄的な戦いぶりが、彼の殉教にいたる過程として描きだされる。いうなれば、本作品は歴史書に組みこまれた聖人伝「殉教者皇帝コンスタンティノス・パレオロゴス伝」であり、歴史と信仰を不可分のものとして包含しつつ、読者たるロシア人に向けて信仰のための伝言を届ける役割を担っている。

平野は作品解題を次のように締めくくる。

> 今日の実証史学的立場からみた歴史解釈評価という点では、神罰論を退けた二人のビザンツ史家、古典的歴史叙述の伝統につらなるハルココンディリスの徳性・運命論や、外交家の視点に立つスフランツィスの国際関係論的解釈に合理性が認められ、必然的に高い評価が与えられている。しかしながら、教会合同にたいする立場をその価値判断に加えることなく、被造物としての人間が共通に受けるべき不可避な神罰に陥落の原因論を反映させたことは、本作品著者の、公正な視点を保証すると同時に、おそらく当時最も広く東方正教世界において受け容れられた見解に立つものとして、「同時代的な解釈」を考慮する上では十分な史料的価値をもつものと言えよう。

3．『1204年の物語』の概括

『1204年の物語』は、『ノヴゴロド第１年代記』におさめられた比較的短い物語で、この作品もおそらくはこの事件を直接目撃したルーシ人によって書かれた。この物語のもっとも古いテクストは、『ノヴゴロド第１年代記』シノド本において読むことができる。写本においてこのテクストが現われる部分は、13世紀に書かれたと考えられている。中世ロシアにおいて、写本制作の年代が、そこに収められた作品が書かれている時代とわずかにしか違わないことはまれであるが、この物語はそうした数少ないケースの一つである。この物語はほかの年代記集成、ことに、世界

（９） 在位1449-1453。

史の叙述を含む『エリンスキイ年代記』第２編纂本にも組み入れられている[10]。

1219年にアントーニイとして大主教となるノヴゴロド市民、ドブルィニャ・ヤコヴレヴィチによって書かれたという説が古くからあるが、確固たる学問的な裏づけはない[11]。ロシアの年代記のなかでも、中世共和政都市ノヴゴロドで書かれた年代記は、感情的、情緒的価値判断を極力排除したラコニズム、飾り気のなさがその特徴となっているが、この作品もその例外ではなく、アンゲロス朝諸帝の内紛からビザンツ帝国が自滅していくプロセスが簡潔かつ克明に追跡されている。1204年の第４回十字軍が、コンスタンティノープルの東地中海貿易上のライバル、ヴェネツィアの巧みな誘導によって、コンスタンティノープルを破壊し、ビザンツ帝国を実質的に壊滅させたことの深刻さは、『1204年にかんする物語』の作者も十分に認識していたと考えられる。

1204年の事件は、おもに小アジア出身のビザンツ帝国の高級官僚にして歴史家、ニケタス・ホニャティス[12]の『年代詳説』によって知られているが、十字軍側からもジョフロワ・ド・ヴィルアルドゥアン[13]、ロベール・ド・クラリ[14]が同名の『コンスタンティノープル征服記』を残している。平野智洋が、筆者による『1204年の物語』の日本語訳に「第４回十字軍の記録としての『ツァリグラード征服の物語』」[15]という解説文を寄せている。その解説文にしたがって、こ

---

(10) *Творогов О.В.* «Повесть о взятии Царьнрада фрягами» // Словарь книжников и книжности Древней Руси. XI-первая половина XIV в. С. 352-354; *Белоброва О.А.* «Антоний (Добрыня Яковлевич), архиепископ Новгородский //Словарь книжников и книжности Древней Руси. XI-первая половина XIV в. С. 39-40.

(11) Там же.

(12) 1155/57-1215/17。小アジア出身のビザンツ帝国高官。コムニノス朝（1081-1185）およびアンゲロス王朝（1185-1204）の歴代皇帝に仕え、1195年には当時の文官最高位、諸局長官（*logothetis ton sekreton*、後の国務長官 *megas logothetis*）に就任した。アレクシオス５世（位1204）の登極後離職し、第４回十字軍に遭遇した後家族と共に帝都を脱出して小アジアのニケアに亡命し、そこで歴史著作『年代詳説』（*Chroniki Diigisis*）を書き上げた。同書は1118-1206年間の諸事件を扱ったビザンツ史の一級史料であり、第４回十字軍のビザンツ側目撃証言としても価値が高い。平野による注からの引用。

(13) 1150-1218。フランス王国東部シャンパーニュ伯領出身の騎士。伯領家令（maréchal）職を長く務め、主君であるシャンパーニュ・ブリー伯ティボー３世と共に十字軍に参加した。ティボー３世死去（1201年）後は新たな十字軍団長にモンフェラート侯ボニファッチョを推挙するなど十字軍中でも重鎮の地位を占め、ラテン帝国成立後も同地に留まって要職を務めた。彼の『コンスタンティノープル征服記』（1197-1207年間を扱い、主として十字軍の結成と行程、コンスタンティノープル征服までの軍事的事件、ラテン帝国成立初期の動向を記す）は、十字軍指導者によるいわば「公式記録」として十字軍内部の詳細な動向と戦闘の正確な記録を伝えている。ビザンツ側に対する偏見・敵意に満ちた叙述も含まれるが、十字軍側史料の中でも一級の地位を占める。彼の著作には以下の日本語訳がある。ジョフロワ・ド・ヴィルアルドゥアン（伊藤敏樹訳）『コンスタンチノープル征服記』（講談社学術文庫）、講談社、2003年。平野による注からの引用。

(14) サン・ポール伯ユーグの家臣アミアン領主の従臣（騎士）。十字軍に参加し、コンスタンティノープル征服後に多数の不朽体（聖遺物）をフランスに持ち帰ったことで知られている。彼の『コンスタンティノープル征服記（遠征記）』は、1143-1216年を扱い、コムニノス時代のビザンツ帝国と西欧人の関係、十字軍遠征から第二代ラテン皇帝アンリの治績までを記している。この書は、ヴィルアルドゥアンとは対照的に一騎士・従軍者の視点から描かれた遠征記であり、現地情報を含めてかなり不正確な風聞をそのまま伝えているなど、正確性・客観性に関する問題はあるものの、重要な史料として位置づけられている。日本語訳がある。ロベール・ド・クラリ（伊藤敏樹訳）『コンスタンチノープル遠征記』筑摩書房、1997年。平野による注からの引用。

の作品を見ていくことにする。

第４回十字軍によるコンスタンティノープル占領（1204年）に関する同時代記録には、ビザンツ側記録、ニキタス・ホニャティス『年代詳説（歴史）』、十字軍参加者の記録、ジョフロワ・ド・ヴィルアルドゥアン、ロベール・ド・クラリによる同題名の『コンスタンティノープル征服記（遠征記）』（*La Conquête de Constantinople*）があるが、これらは双方の当事者による記録である。一方で、ロシア語の記録『1204年の物語』は、平野によれば、第三者の視点から事件を描写し、当事者の記録とは異なる独立史料のカテゴリーを形成する。

その記録は比較的短いが、「逸脱した」十字軍の記録を、その背景としてのビザンツ帝国内紛に遡って説明している。弟イサアキオス２世アンゲロス[16]を陥れたアレクシオス３世アンゲロス[17]の登極、伯父を欺いて脱出したイサアキオスの息子アレクシオス４世アンゲロス[18]の西欧逃避行と十字軍との接触が順に述べられる。他方で、『1204年の物語』は、十字軍遠征に出る者たちに対する教皇（インノケンティウス３世[19]、しかし、その名は記されていない）とドイツ王フィリップ[20]の「ツァリグラードと戦わないように…ギリシア人の国に危害を加えてはならない」という指令（教皇と皇帝が統一して指令を与えたというのは明らかな錯誤）を、そして十字軍士たちが欲得のためにその指令を無視したことを伝え、これらを事件の枠組みとして据える。

軍事的事件としての十字軍のコンスタンティノープル攻撃について、『物語』の記録は概ね正確であり、平野によれば、他史料（ホニャティス、ヴィルアルドゥアン、クラリ）との整合性も保たれているという。1204年４月９日の攻撃の失敗、主日を置いて三日ののち、４月12日の総攻撃という時間的経過、艦艇を用いた海側城壁、とくにエヴェルゲティス修道院（ヴェルゲティスという名の聖救世主聖堂）とその隣接区域への兵力集中、登城梯子などの攻城兵器の使用と十字軍士の城内突入、防衛側の逃亡という戦況推移についても簡便ながら正確な記録を取っている。

また、政治的事件推移についても、ホニャティスにあって十字軍側には見られない事件、たとえば、アレクシオス４世が細工を施した木樽に潜んで帝都を脱出したというエピソードや、十字軍の要求に不満を抱いた市民による対立皇帝ニコラオス・カナヴォスの擁立とアレクシオス５世ドゥカス・ムルヅフロス[21]による投獄といった事件も収録されている。これらの記録は、上記の軍事記録と合わせ、少なくとも著者が同時期コンスタンティノープルに滞在し直接状況を検分したか、あるいは、本文に登場する防衛側従軍者ヴァランギ（ワリャーギ[22]）などへの取材に

---

(15)　三浦・平野「1204年の物語」324-327頁。
(16)　在位1185-1195、1203-1204。
(17)　在位1195-1203。
(18)　在位1203-1204。
(19)　在位1198-1216。1160-1216。
(20)　在位1198-1208。
(21)　在位1204。

基づいて、状況をかなり正確に把握していることを一つの特徴として挙げることができる。

他方で、カナヴォス同様に市民が擁立を試みた「ラディノス」なる人物や、復位したイサアキオス２世と息子アレクシオス４世との対立のなかで息子が父に向かって言い放った「あなたは目が見えません…私こそが皇帝です」といった発言など、『1204年の物語』の独立証言もいくつか存在すると平野は述べている。とりわけ、逃亡前にアレクシオス３世が弟イサアキオスの許を訪れて述べたとされる、「弟よ、このような仕打ちをしたからには、私を許すがよい。これがおまえの望んだ帝位だ」という言葉は、さまざまな文献に引用され(23)、この人物についての印象的な挿話となっている。

しかしながら、平野によれば、この作品のもっとも重要な特徴は、これまで帝都で崇敬されてきたさまざまな聖堂、修道院、そしてそこに保管されていたイコンや不朽体といった、キリスト教信仰の拠りどころの破壊と蹂躙について特別な関心を払っている点である。人的な被害という点でも、修道士、修道女、司祭たちについての記録がほとんどである。これは、陥落後にコンスタンティノープル市民を襲った悲劇について語るホニャティスの場合とも、略奪者となった十字軍士たちが得た富の莫大さについて誇らしげに記すヴィルアルドゥアン、クラリの場合とも対照的である。この作品は、東方正教の宗教観が色濃く表れているのである。

また、平野によれば、陥落の原因やその歴史的意義に関して、この作品は、そのほかの史料と共通の認識をもちつつも、それらとは異なる結論に達している。諸帝の諍い、その誤った判断、臆病な資質、無責任な行動、十字軍士の貪欲に、帝都陥落の原因を求めることは諸史料で一致しているが、ホニャティスはこれらを総括したうえで、首都の陥落が人々に対する神罰であるという見解をも示した(24)。この神罰論は、勝者となったヴィルアルドゥアンの「全ては神の思し召し」(25)という歴史観と表裏一体である。しかしながら、この作品は、陥落という事件を「コンスタンディノスの町とギリシアの国は、皇帝たちの内争によって滅び、その国をフランク人達が所有する事になった」と簡潔に総括している。平野は自らの解説文を次のように締めくくる。

> 本書は、この事件を正教信仰の本山を襲った惨劇の報告録（これもある種の殉教伝であろうか）であると同時に、東地中海世界に於ける国際政治と軍事事情に関する簡潔な報告書でもある。その報告を通じて本書は、読み手となるロシアの人々に、信仰の絆と国を破壊するのが常にそこに住む人間自身であるという訓戒を伝える事を意図している様に思われる。(26)

---

(22)　スカンディナヴィア出身の兵員のこと。広く北方、キエフ・ルーシの出身者も含んでいた。

(23)　一例として、井上浩一『生き残った帝国ビザンティン』（講談社学術文庫）、講談社、2008年、226頁。

(24)　*Nicetae Choniatae Historia*, recens. I. A. van Dieten, v. I-II (Berlin- New York, 1975), pp. 573-582.

(25)　ヴィルアルドゥアンは「神の思し召し」を強調している。ヴィルアルドゥアン『征服記』20、145、165、171頁。

(26)　三浦・平野「1204年の物語」327頁。

4．『1453年にかんする物語』の宗教心理的構造
― 予兆、堕罪、悔悟、勇戦、絶望、殉教

ここまでの部分で、両作品の中心に宗教的な関心があることを確認してきたが、『1453年にかんする物語』の場合、その宗教的な関心は、「帝都の滅びの必然性」を自他に納得させるために現われていると考えることができる。

まずコンスタンティノス大帝時代、ビュザンティオン創建のさいの、滅びの定めについての予兆が語られ、コンスタンティノープルの未曽有の繁栄のなかでの堕罪が厳しく指摘され、その懲罰としてオスマン帝国スルタン、メフメト２世による侵略に話がおよび、ここにおよんで皇帝コンスタンティノス11世パライオロゴスを含む、コンスタンティノープル住民が悔悛し、神に望みをかけて勇戦するものの、しかしながら、この悔悛は神の受けいれるところとならず、ふたたび滅びの予兆が現われる。これが一つのサイクルをなし、同じサイクルがもう一度繰り返され、もう一度滅びの予兆が現われたのち、皇帝コンスタンティノス11世の滅びへの覚悟があたかも殉教への意志のように捉えられて、ビザンツ帝国の玉砕という大団円へ向けて語りが進んでいく。正教信仰の不滅が主張されているようにも見える。これが物語叙述の基本構造である。具体的にテクストを見ていこう。

ビザンティオンを帝都として整備したとき、コンスタンティノス大帝に次のような予兆が現われる。

> すると、見よ、突然穴から蛇が這い出し、そこここをのたうちはじめた。すると、ただちに上方から鷲が舞いおり、蛇を咥えると、高みに飛び立った。蛇は鷹の身体のまわりを締めあげた。皇帝とすべての人々は鷹と蛇とをじっと見ていた。鷹は長いこと視界から消えるほど高く舞い上がったが、降下するとふたたび姿をあらわし、蛇とともにさきほどと同じ場所に落下した。なぜなら、鷹は蛇に打ち負かされたからである。人々は走りよって蛇を殺し、鷹を救い出した。そして、皇帝は大いなる畏怖にとらわれ、学者と賢者を呼び集め、彼らにこの験（しるし）を物語った。彼らは思案をめぐらせたのち皇帝に答えた。「この場所はセドゥモホルムィ（七つの丘）[27]と呼ばれ、この世界でほかの町と比較にならぬほど、大いに讃えられ、大きく発展することになるでしょう。鷹はキリスト教徒の徴で、蛇はムスリムの徴です。蛇が鷹を打ち負かしましたことは、ムスリムがキリスト教に打ち勝つということを

(27)　コンスタンティヌス帝はローマを模して７つの丘と14の区を定めた。これは、のちにテオドシウス２世による新城壁建設にともなう市域拡大後も維持され、再設定された。なお、ローマの丘にはそれぞれ固有の名称があったが、コンスタンティノープルの丘には単純に第１、第２という序数がつけられたのみである。尚樹啓太郎『ビザンツ帝国史』28頁、地図１も参照。以下、引用本文の注は、基本的に平野によるものである。

意味します。」コンスタンティヌス大帝はこのことにひどく不安を掻き立てられたが、しかしながら、彼らの言葉を書き留めさせた。[28]

コンスタンティノープル住民の堕罪については次のように語られている。

しかし、私たちの本質は邪悪で冷酷だったので、私たちは、正気を失った者たちのように、神の慈悲と寛大さに背を向け、悪行と無法にふけり、そのことで神といと清らかなるその母御を怒らせ、みずからの誉れと栄えを失った。同じように、この皇帝の君臨する町は、はかり知れない罪と無法のために、いと清き神の御母のこれほどの寛大さと恩寵を失って、幾万とない災難とありとあらゆる不幸に多年苦しむことになったのである。[29]

やがてメフメト２世の率いるオスマン軍に包囲され、激戦がはじまる。そのなかで再び予兆が現われる。

５月21日、私たちの罪のゆえに町で怖ろしい徴があった。多くの人々が集まり、偉大なる神の叡智の教会[30]の丸屋根の窓から、大きな炎が吹き上げ、長いあいだ教会の上部全体を覆っているのを見た。すると、炎が一つになったかと思うと、えもいわれぬ光となって輝き、まもなく天まで昇った。この光景を見ていた人々は、ひどく泣きはじめ、「主よ、憐れみたまえ」と叫びだした。かの光は天まで達した。天の扉が開くと、光が吸い込まれ、ふたたび扉が閉じた。総主教はすべての貴族と顧問官たちを集め、皇帝のところに行き、皇帝が后妃を連れて町から出るように皇帝を説得しはじめた。皇帝は彼らの言うことを聞かなかったので、総主教は言った。「おお、皇帝陛下、こうしたことはすべてこの町について予言されていたことにほかなりません。そして、このたびは別の怖ろしい徴が起こりました。聖なる大教会とこの町の守護のためにユスティニアヌス皇帝の治世に神が遣わされた天使が、その夜、天に飛び去ったのです。」[31]

この徴が現われるにおよんで人々は悔悛する。

「われらの主なる神よ、不死であり悠久きわめがたい方よ、目に見えるもの、目に見えな

(28)　三浦・平野「1453年についての物語」126-128頁。
(29)　三浦・平野「1453年についての物語」131頁。
(30)　コンスタンティノープルの聖ソフィア大聖堂のこと。
(31)　三浦・平野「1453年についての物語」145146頁。

いもののあらゆる被造物の創造者よ、不敬で性邪悪なるわれらのために天から降り、受肉し、われらのために自らの血を流された方よ、いまこのとき、支配者なる天の皇帝よ、そなたの聖なる住み処からあなたのおとなしい僕たちをご覧ください。そして、われらの罪深い祈りをお聞き届けください。そなたの耳を傾け、死の際にいるわれらの言葉をお聞きください。主よ、そなたは自らの手で造った被造物を破壊することをお望みになりません。ましてや、人間が死滅することも望まれていない。そなたはすべての人々が救済されること、真実の理性に到達することを願われています。そなたの数知れぬ恩寵を期待し、そなたにひざまづき、そなたのあとについてまいります。心の奥底からお祈り申し上げ、そなたの慈悲を求めます。慈悲をかけてください、主よ。(32)

かくしてビザンツ帝国軍は勇ましく戦うが、悔悛は神の受けいれるところとはならなかった。ふたたび滅びの予兆が現われ、皇帝コンスタンティノス11世は死を決意する。

その夜の第7の刻に、大いなる闇がこの町を覆いはじめた。高みにある空気が凝縮して、泣きはらしたかのような趣で町のうえにかかり、大きさと見かけが水牛の目にも似た、大粒の赤いしずくを涙のように流した。それは長い時間地上にとどまっていたが、すべての人々は驚きのあまり絶望の淵にあり、恐怖に駆られていた。総主教アタナシオスは時を移さず皇帝に逃亡を勧めたが、皇帝は彼らの言うことを聞かず、「神のご意志が実現しますように」と答えるばかりであった。(33)

ビザンツ帝国最後の皇帝の最期は次のように描かれる。

皇帝は神のご命令を聞いたので、大教会に入り、地にひれ伏して神の慈悲と罪への許しを求め、総主教、すべての合唱隊、皇妃と別れを交わした。そして、皇帝は四方に跪拝して教会から出ていった。すると、その場に居合わせたすべての合唱隊、すべての民衆、数知れぬ女たちや子供たちが号泣とうめき声をあげ、いっせいに大声で泣きはじめた。それは、あたかもあの大教会が揺れ動くかに思われ、私が思うに、彼らの声が天に達するかのごとくであった。皇帝が教会から歩み去ろうとするとき、皇帝はこのことだけを口にした。「神の教会と正教の信仰のために苦しみを受けようと思う者は、私とともに行くがよい。」そして、馬に飛び乗り、神を知らぬメフメトと出会うことを期待して黄金の門を指して進んだ。かく

(32) 三浦・平野「1453年についての物語」147頁。
(33) 三浦・平野「1453年についての物語」152-153頁。

のごとくして敬虔なるツァーリ、コンスタンティノスは5月29日、神の教会と正教の信仰のために殉難した。生き残った者たちの話によれば、コンスタンティノスは自らの手で6百人以上のトルコ兵たちを殺した。予言されていたことが実現したのである。コンスタンティヌスによって町は建設され、コンスタンティノスの御世に滅びたのである。時として、罪のために神の裁きによって報復されることがあるからである。悪事と無法は力強き者たちの玉座をも覆す。(34)

『1453年にかんする物語』は、一貫して正教擁護のパトスに貫かれていると言える。これにたいし、『1204年の物語』はどうだろうか。

5.『1204年の物語』の簡潔さは何に由来するか　―　祖国への警告

物語は、ビザンツ帝国アンゲロス皇帝たちの醜い内輪もめの詳述からはじまるが、一切の感情の発露を排した簡潔な文体は印象的である。

6712年（1204年）ツァリグラードでアレクシオス（3世）(35)が統治していた。自らの弟、イサアキオス(36)が皇帝であったときに、アレクシオスは自らの弟、イサアキオスの目を抉り、自らが皇帝となったのである。アレクシオスは、イサアキオスの息子アレクシオス（4世）(37)を高い壁の奥に押しこめ、彼がそこから出られないように見張りを立てた。いくばくかの時間が経つと、イサアキオスは大胆にも自らの息子を牢獄から出してくれるようにと、兄に嘆願しようと心に決めた。イサアキオスは兄を説き伏せ、息子とともに帝位を窺わない旨の宣誓をおこない、牢獄から出され、自由の身となった。アレクシオス帝はイサアキオスとその息子のことを信じ切って、安心していた。というのは、彼らは固く誓いを立てたからである。(38)

---

(34)　三浦・平野「1453年についての物語」155頁。

(35)　アレクシオス3世アンゲロス帝（1153頃生、位1195-1203）。アレクシオス1世コムニノス帝（位1081-1118）の娘セオドラとコンスタンディノス・アンゲロスの孫。1195年、遠征中の弟の目を潰して自らが帝位に上った。以下、引用した本文の注は、基本的に平野によるものである。

(36)　イサアキオス2世アンゲロス帝（1156頃生、位1185-1195、1203没）。アレクシオス3世の弟。先帝アンドロニコス1世コムニノス帝（位1183-1185）の恐怖政治で親族が粛正されていく中で反旗を翻し、クーデターによって帝位に登極した。しかし統治者・軍司令官としての決断力に欠け、遠征中のクーデターで廃位され、目潰しを受けて投獄された。

(37)　アレクシオス4世アンゲロス帝（1182/83生、位1203-1204）。イサアキオス2世の息子。同時代ビザンツ史家ニキタス・ホニャティスによれば、伯父には厚遇され、遠征への同道も許されていたが、父の影響で帝位奪回を志すようになった。

(38)　三浦・平野「1204年の物語」328頁。

アレクシオス３世は弟イサキオスの目を抉り、自らの皇帝になり、皇位継承の候補を幽閉する。これ自体が残酷でひどい話であるが、退廃のありさまはさらに続いていく。

そのあと、イサアキオスは心変わりし、皇帝の地位に登りたいと望み、ひそかに書簡を送って自らの息子を焚きつけはじめた。いわく、「私は自らの兄に善を施してやっていた。異教徒に身代金を払って彼を助けだしたのは私だ。ところが、あの男は私に悪で報いた。私の目を抉り、私の帝位を奪った。」彼の息子は、父親が唆すまますっかりその気になり、何とかこの町[39]を出て遠国に逃れ、そこから帝位を狙おうと考えた。彼は船まで導かれ、樽のなかに入れられた。樽は３重に蓋がついており、イサアキオスの息子は仕切りのおくに入り、もう片方の側には水が注ぎこまれ栓がしてあった。これ以外の方法で、町から脱出する方法はなかったからである。かくして、アレクシオスはギリシアの国から落ちのびた。[40]

このことに気づいた皇帝のアレクシオスは追っ手を差し向けた。多くの場所でアレクシオスの探索をおこない、彼がいた船にも立ち入ってあらゆる場所をくまなく探し、樽の栓を抜いてみたが、そこから水が流れ出るのを見ると立ち去り、彼を見つけることはできなかった。[41]

かくしてコンスタンティノープルからの逃亡に成功したアレクシオス４世は、秘策を用いて国外脱出に成功して義兄、ドイツ王フィリップの許に亡命し、自らの帝位獲得への協力と引き替えに聖地遠征費用の拠出を申し出て、十字軍コンスタンティノープル包囲のきっかけを作ったのである。

一方で、「フランク人」の貪欲と狼藉は次のように描かれている。

フランク人[42]と彼らのすべての軍勢は、イサアキオスの息子が彼らに約束した金と銀を喉から手が出るほど欲しがり、皇帝と教皇の命令を忘れた。まずスド[43]に入ると鉄の鎖を引きちぎり、町にどっと攻め入り、四方から家屋敷に火をかけた。このとき、皇帝アレクシオスは火の手が上がるのを見ると、彼らに戦いを挑むことをしなかった。[44]

---

(39)　コンスタンティノープルのこと。

(40)　アレクシオスが父イサアキオスの使嗾を受けて伯父からの離反を決意したこと、そして船底の樽に隠れた脱出したという記述は、ホニャティスのものとほぼ一致する。

(41)　三浦・平野「1204年の物語」328-329頁。

(42)　中世ロシアにおいてはイタリア人をこう呼びならわしていたが、ここでは十字軍の兵に意味を拡大して用いられている。

(43)　東からコンスタンティノープルを取り囲む金角湾のこと。スドは、防衛上の目的から鉄の鎖がめぐらされていた。十字軍の兵士たちは、彼らの艦船が城壁に迫ることができるように、この鎖を引きちぎったのである。

そして、行動の抑制のきかない皇帝たちの乱脈ぶりとコンスタンティノープルの町の破壊とが描かれる。ここで映し出されるのは、兄であるアレクシオス３世と弟であるイサキオス２世の軋轢である。

> 自分が盲にした弟のイサアキオスを呼び出すと、彼を帝位に即けて言った。「弟よ、このような仕打ちをしたからには、私を許すがよい。これがおまえの望んだ帝位だ。」(45)そして、町から逃げだした。かくして、町とえもいわれぬ美しさを誇った教会は焼かれ、その数を数えあげることを私たちはできないのである。歴代のすべての皇帝が描かれていたソフィア聖堂の表玄関、競馬場は焼けただれ、街並みは海にいたるまで、皇帝の門、スドのあたりまで焼け落ちた。(46)

兄帝と弟帝の争いがひと段落ついたと思ったら、今度は父と子が争いはじめる。

> このとき、イサアキオスの息子はフランク人たちとともに皇帝アレクシオスを追いかけてきたが、追いつくことができずに町に引き返した。そして、父親を帝位から追うと、自らが皇帝の玉座についた。いわく、「あなたは目が見えません。どうして帝位を保つことができるでしょうか。私こそが皇帝です。」(47)このとき、皇帝イサアキオスは町のことを、自らの帝国のことを、金や銀を供出した修道院の略奪のことを大いに嘆き、ますます病を篤くし、修道士となってからこの世を去った。(48)

平野は次のようにこの物語の特徴をまとめているが、それはたいへん的確である。

---

(44)　三浦・平野「1204年の物語」330-331頁。アレクシオス３世は、戦闘を部下に任せたまま自ら長らく宮殿に引きこもり、状況に有効な対策を取っていなかった。彼は十字軍の放火による火災被害に激怒した市民達の非難を受けて仕方なく自ら陣頭に立つ事を決意し、首都の騎兵・歩兵軍団を編成して十字軍に相対した。しかしほぼ全く干戈を交える事なく早々に逃走した。

(45)　この言葉は、アンゲロス兄弟の関係を象徴する言葉として諸書で引用されている。たとえば、井上浩一『生き残った帝国ビザンティン』（講談社学術文庫）、講談社、2008年、226頁では、「すまなかった、今日からはまたお前が皇帝だ」となっている。

(46)　三浦・平野「1204年の物語」331頁。

(47)　イサアキオス２世の復位は、アレクシオス３世逃亡後の空位状態を解消し、同時に十字軍の傀儡として首都市民が拒絶したアレクシオス４世の登極を回避するために執られた措置であった。他方、十字軍側はイサアキオスが盲目であるが故に帝位資格なしと見なしており、イサアキオスがアレクシオス４世と十字軍との協定を追認し息子を後継者として承認したことでようやく妥協がなされていた。ホニャティスはイサアキオスが次第にその権力を息子に奪われていく事に憤慨し、度々息子の資質の欠如などを言い立てたという。実際、アレクシオス４世は少数の友人と共にフランク人達に交わって酒宴と骰子賭博に興ずるなど、皇帝に相応しくない振る舞いが目立った。

(48)　三浦・平野「1204年の物語」331-332頁。

これに対し、本書は、陥落という事件を「コンスタンディノスの町とギリシアの国は、皇帝達の内争によって滅び、その国をフランク人達が所有する事になった」と簡潔に総括している。そこには、後の陥落記録に現れる様な不吉な予兆も、罪深き人々に下された託宣も現れず、神罰の類に関する言及もない。ただこの悲劇がビザンツ人のいわば自滅であるという、事件の核心のみが述べられている。(49)

以上で、『1204年の物語』を見てきた。この物語のなかでは、帝権の腐敗がこれでもかこれでもかと描かれてはいるものの、作者の感情の発露はいっさい抑制されていたことに私たちは気づく。問いを立てよう。この感情の抑制、文体の簡潔さは何に由来するのであろうか、と。

1204年のコンスタンティノープルの壊滅という悲劇が、統治者たちの愚劣と無気力によるものだったという報告が、なぜ当時のルーシに必要だっただろうか。このことを考えるためには、12世紀末から13世紀にかけてのルーシの政治的状況を見なくてはならない。11世紀の半ばにヤロスラフ賢公が亡くなったあと統一が失われ、ルーシは分領諸公国が割拠する政治的状況にあった。地方が独立する傾向自体は、地方が成長するという側面があるので、必ずしも悪いことではないが、諸公は諸都市の母キエフの大公位をめぐって熾烈な闘争を繰り広げた。この内憂に、騎馬民族ポーロヴェツ人の侵略攻撃という外患が加わる。12世紀はじめ、ビザンツ皇統の血をひくウラジーミル・モノマフが現われて平和を回復し、ポーロヴェツ人の侵略を食い止めたが、モノマフの死後、力をもった指導者は現れず、内争に起因する危機は深まった。

そうした状況のなかで、ルーシの中心は南のキエフから北東のウラジーミルへと移る。それを主導したのがアンドレイ・ボゴリュプスキイ、すなわち、「神に愛されたアンドレイ」である。アンドレイ公は自らの腹心である聖職者フェオドルを無理やり全ルーシ府主教に即けようとするが、ビザンツ側の反対に遭い、フェオドルはロストフ主教となる。アンドレイ公の意図は、皇帝と総主教の支え合いに似た、公すなわち君主と主教すなわち聖職者の協働によるビザンツ的中央集権的統治体制を築きあげることだったと思われる。アンドレイ公とフェオドルは北東ルーシで自前でビザンツ的支配体制を確立することにより、ビザンツ帝国そのものの宗主的支配からの離脱を図ったのだ。ところが、この野心は、キエフ・ルーシの金口ヨハンネスと喩えられるトゥーロフのキリルの猛反対に遭って頓挫し、アンドレイ公も中央集権化の強行を嫌った配下の貴族に殺害される。これによって、ルーシに政治的秩序を回復しようとするすべての試みが頓挫し、深刻な戦国的無秩序が生じた。ちなみに、1185年に、目先の利益のためにポーロヴェツへの遠征を試み、失敗して虜囚の身となるノヴゴロド・セヴェルスキイ公イーゴリを主人公とした中世ロシア文学の傑作『イーゴリ軍記』は、このような絶望的な政治状況から生まれてきたものである。

---

(49) 三浦・平野「1204年の物語」327頁。

1204年のコンスタンティノープルの事件の目撃者であったこの物語の作者は、祖国のこの嘆かわしい政治状況にたいする深い懸念を抱きながら、同じ類のビザンツ諸帝の振舞いを最大限の注意をもって見ていたに違いない。そして、精力的な情報収集をおこない、正確無比な観察眼で集まった情報を選別しながら、目標を狙いすました簡潔な叙述スタイルで、この物語を祖国に書き送り、内争が自滅につながることを警告したのだと考えられる。しかし、作者の思いは祖国には伝わらなかったように思われる。内争は止むことなく、その30年後にモンゴル勢の侵攻によってルーシは潰滅することになる。

6．まとめ　―　ビザンツ共同体の一角としてのルーシ

本稿では、『1453年にかんする物語』と『1204年の物語』という千年の歴史をもつコンスタンティノープルの壊滅の物語を見てきた。いずれも、ビザンツ帝国を精神的な宗主国であると見なすルーシ出身者によって書かれたものだが、作品が書かれた時代の懸隔から来る、二つの作品のあいだの大きな差異に着目しないわけにはいかない。

『1453年にかんする物語』は、天地創造紀元7000年をまぢかに控え、世界の終末が来るという危機意識のなかで書かれ、終末観が先鋭的に現れている。ここに「ロシア」の萌芽が見える。それに対して、『1204年の物語』はそうした終末観がほとんど感じられず、ルーシはルーシのままだ。関心は、統治者の愚かさとその生活の乱脈ぶりに絞られて現世的であり、なおかつ社会的な観察眼も鋭く、同様の問題を抱えていたルーシに向かって静かに警告を発している。終末観の有無が二つの作品を本質的に分ける点である。

一方、両者で共通しているのは、にもかかわらず、宗教的関心の強さである。コンスタンティノープルの惨禍を記すにあたり、その作者たちは、つねに教会、聖遺物、教会の器具の破壊に最大限注意を払い、修道士、修道女の犠牲者に触れている。そこで作品は、平野が述べるように、殉教者伝の性格を帯び、自らの存在の精神的支柱であるコンスタンティノープルの「犠牲」に強い衝撃を受けている。以上のことは、ルーシが、オボレンスキイのいうビザンツ共同体 Byzantine Commonwealth の欠くべからざる一角だったことの証左であると同時に、社会を見る冷静な観察眼が終末の意識のなかで変成を遂げ、その終末観と犠牲の意識のなかから、ルーシにおいて新たに救済の国である「ロシア」としての自意識が生まれてきたことを示しているように思われる。